

すんづら

森野 水琴

冬の朝、一面の雪の上を沈むことなく快適に歩ける状態を「すんづら」と呼んでいる。

昨年の十一月二日の午後、故郷の病院の手術室の前で母を待っていた。記憶が曖昧になって介護施設に入所していた母が、ある夜、手洗いにっこうとして転倒し、大腿骨を骨折してしまった。九十歳を超える高齢にもかかわらず手術してくださるとの説明を前日受け、手術の同意書にサインして、主治医にお任せすることにした。

コロナ感染防止のため、介護施設も、入院している病室も面会謝絶で、手術前に束の間会うことができるというので待っていた。

寝台に乗せられて母が来たが、私のことは分からないふうだった。前から覚悟していたとはいえ少し寂しかった。ふと母に声をかけた。

私「明日、誕生日だよ」

母「氣い付けて帰られ」

何か通じた氣がした。母が私を産んだのを思い出してくれた氣がして嬉しかった。十一月三日、文化の日に生まれたことを誇らしく思った。文化、文学、文に励むのは、私の宿命なのである。

二時間余り後に、母が手術室から出てきた。全身麻酔が効いているので眠ったままの母だが、無事手術は成功したとの説明に安堵し、東京への家路に着いた。

術後三週間のリハビリの後、母は退院した。案の定、転倒して骨折したことも、手術したことも覚えていないらしい。

年が明けて、故郷の雪便りが届く。晴れの予報を聞いて、ふと思う。

きょうは すんづら だろうか